

子どもの自立

香川三六（東京）

*不動塾（東京都三鷹市）

要旨

キーワード：

われわれ人間は、サリバンのライフサイクルにみるように、乳児期—幼児期—児童期—前青年期と年を重ねるに連れて、未成熟な状態から次第により成熟した状態に変化する。つまり、人格上に何らかの変化が起こると考えられる。その人格上の変化にはいろいろの側面がある。例えば、幼児の受動的な状態から能動的な状態の成人になっていく変化、幼児の限られた行動のレパートリーから成人の多様な行動のレパートリーへの変化、幼児の自己認識の欠如ないし不足の状態から成人の自己を認識しコントロールできる状態への変化、幼児の現時点のみに集中した短期的な展望から成人の過去から未来に亘る長期的な展望への変化、幼児の自己本位の単独的行動から成人の他者を考慮した協同的行動への変化などがあげられるだろう。

更に、重要な変化の一つに幼児の依存的状態から成人の自立的状態への変化がある。この自立ということについて考えてみたい。

I) 自立とは？ 依存とは？

自立ということばを広辞林でみると次のように記されている。

- (1) 自分の力によって生計を立てること
- (2) 服従の関係を脱して自主の地位に立つこと
- (3) 自ら帝王の位に立つこと

子どもの自立という場合、(2)の解釈をとることが妥当であろう。この解釈の上に立って次のように定義してみた。

自立とは、自ら目的を明らかにし、その目的を達成するための手段を考え、多くの選択枝のなかから選択して意志決定し、計画を立てて実行に移す。実行の途中にもフィードバックし臨機に計画を改定しながら続行する。そして、その結果について自ら評価し、責任を負うという一連の行動を自立としたいのである。

依存とは、自立に対応することばであるが、広辞林には次のように記されている。

依存とは、他に頼って存在すること。

上述の自立の定義に対比して定義するとすれば次のようにいえるであろう。

依存とは、他者（子どもの場合は親や教師など）が決定したことを指示命令されて実行することである。そして、多くの場合、その結果について他者から評価され、場合によっては、手段の

まずさや怠慢を非難され、責任をとらされたりする。

別ないい方をすれば、Plan Do See の Do だけを行うように仕向けられる状態である。これに対し、自立は Plan Do See のすべてを自分1人でやれる状態といえるであろう。どちらのやり方が人間的であるかは説明の余地はなかろう。

II) 子育てと自立

子育ての基本の一つは、子どもの発達段階に応じて自立の方向へ育児の手段を変えていくことにあることはいうまでもない。そして、子どもをよく観察すると、自立的行動を好んでしているように思われる。にも拘らず、それは母親に多いように感じるのだが、自分の好みに合わない子どもの行動をたしなめがちであって、自立することを妨げているかのようには思われることも少なくない。子どもの自立行動をたしなめる代わりに、論理的結末を味わったり洞察させる親の態度が望まれる。

子どもは自分で苦勞することによって初めて成功感を味わい、自信と自尊心を持つことができる。そうであるのに、その苦勞を少しでもとり除いてやるのが親の勤めと考える親も少なくない。自立をうたう親ならば、子どもからそのような貴重なチャンスを奪うような愚を犯しはしない。

なぜ、子どもが親に依存的であることを容認するのであろうか。また、何故子どもに親の是認や許可や賛同を得るような習慣—それは依存の奨励になるが—を求めるのであろうか？ 子どもに頼られたり、依存されることを親が好むからであらうか？ 頼られることによって親子の上下関係が確認できたことに満足するのであろうか？ 子どもの苦勞をとり除いてやるのは親心であり思いやりであり、わたしは親心や思いやりのある立派な親だと自負できるからであらうか？それが母性本能というもので、親の愛情なのだという錯覚に陥ってないかどうか検討の余地があるように思う。

「母親というものは、子どもが頼りにする人間ではなくて、子どもが他人に頼ることを不必要にさせる人間である」—ドロシー・キャンフィールド・フィッシャー—

III) 自立と親（教師）の対応

一般に、上下関係の強い、権威主義の組織には、人間を未成熟のままに置く条件があるとわたくしは考えている。未成熟の中に依存があることはいうまでもない。わたくしは多くの企業組織運営の実態をみてきたが、横の関係を重視した組織では、創造性も高くやる気も充分で、成功した企業が多いことを実感してきた。

家庭という組織も学校という組織もまた例外たり得ないと思う。

次に、親（教師）の落ち入り易い、自立の妨げになると考えられる具体的な言動について例示してみたい。それが自立を妨げることばになっているかどうか批判されたい。アドレリアンの助言は、…するのを止めて…してみませんかというようにアドバイスする。下記の例示は、…するのを止めてということだけしか述べていない。アドレリアン各位におかれては…してみませんかというところを作文してみてくださいと思う。

(1) 解決策を直ちに与える

子どもがどうしたらよいかと意見を求めに来たとき、直ちに解決策を与えてしまう。答えないと親でない、親の沽券にかかわるかのように感じる。

「それは先生に相談しなさい。」

「お友達に謝っていらっしやい。」

「いじめられたらいじめ返してやったらどう。」

(指示が子どものやりたくない行動であれば、決して実行されることはないだろう。)

(2) 批判・非難する

子どもの自主的な行動に対して、ネガティブな評価をしたり、とがめだてをする。

「お前のやり方はなっていない。」

「お前の考えはまちがっている。」

「あなたにやってもらったのではなかった。」

(子どもは勇気と自信を失うだろう。)

(3) 悪口を言う。馬鹿にする。辱める

子どもの性格のよくない点や能力不足に対してそれを指摘し皮肉を言う。そうすればそれを直すと錯覚しているかのようなのである。

「お前は馬鹿か、よくそんなことできるナ」

「お前はなっていないヨ」

「そんなことしか出来ないの」

(いつも馬鹿にされたり辱められたりしていると反抗して家族価値に反することをするだろう。)

(4) 子どもを詰問する

親の意に反する行動に対して、しつこくその理由を問い訊す。

「どうして勉強するのが嫌なの。ネどうして」

「何故そんなことをしたんだ 何故なんだ。」

「お前は何時からそんな風になったんだ」

(子どもは親に信頼されていないと感じる。相互信頼感が失われる。)

(5) 説教する

子どもがなすべきこととしてはならないことに対して、いちいち改まって説教する。

「そんなことするもんじゃありません。」

「あなたは今すぐ宿題をやりなさい。」

「友達と長電話してはいけません。」

(子どもは正当なことばに反対できないから、またかと不平をもつ。毎回同じことばかりうるさいナとイライラする。)

(6) 脅迫する

親が注意したことを繰返して、脅す。

「あれほど注意したのに勉強しないからこんな成績で、どうするの。今度は落第よ。」

「もう一度言ってごらん。ただじゃあおかないから。」

「今度そんなことしたらお父さんに言いつけるからネ。」

(信頼感を全く失う。どうでもなれとふてくされる。口をきかなくなる。)

後記

アドレリアンはエンカレッジマシンであると野田先生はよくいわれる。もし、この論文が、親としてのアドレリアンのために書かれたとすれば、この論文はエンカレッジにはなっていない。この論文をものした所以のものは、そうした親が世間には多いので、また、そのために子どもの問題が多いので、そうした親のカウンセリングの際の参考になればありがたいと思って書いたものであることを、いいわけがましく書くのもわたしのライフスタイルのわざであろう。呵々。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載